

文書館

レキシ ノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 20

「新版ちよぼくれ節」（鳥居家文書80）

戦いノオト③

幕末の歌(2) ～ちよぼくれ～

幕末期の多くの事件は、文字で書かれたもののほかに、調子のよい七・五調にのせて歌われ、また語られて人々のあいだに知られていきました。ここで紹介する「ちよぼくれ」もそのひとつです。

「ちよぼくれ」はもともと「祭文読み」だったと思われませんが、江戸時代後期には「クドキ（口説き。説経節や人形浄瑠璃・歌舞伎において情感たっぷりに聞かせる部分）」の影響を受け、タイムリーな話題を聴衆におもしろおかしく、興味をそそるように聴かせたものです。大坂では「ちよんがれ」、江戸では「ちよぼくれ」と呼ばれました。当館にのこる資料は、いずれも「ちよぼくれ」とし、「ヤレヤレ皆さん、聞いてもくんやれ」で始まります。

「ちよぼくれ」は、錫杖や鈴などを鳴らして拍子を取り、半分踊りながら早口で歌う大道芸・門付芸だったと思われませんが、音源は残っておらず、その調子や踊りについては明らかではありません。

【新版ちよぼくれぶし】

上の写真は安政7年（1860）におきた桜田門外の変を題材にしたものです。いうまでもなく世上の大事件であり、安政の大獄で吉田松陰を失った長州藩にとってみれば、なおさら耳目を集めたことでしょう。江戸で作られ、歌われたものを書き取ったものと思われま。井伊直弼の乗った駕籠が襲われたときの一節。

…跡に一人師直さんは、駕籠の中にて思案も跡先（あとさき）、人につ（突）かれて三途の旅路、首は東にからだ（体）は西に、はなればなれの人足なんぞハ、ここに舌人、かしこに忒人、腕がないとか頭がないとか、うろろうろたへ主人の敵（かたき）を、見ながら逃して屋敷へ帰る、本より情弱の風とハいへども、あまりたわけた始抹じゃねへかへ、ソレ…

ここでは主人公の名をそのまま言わず、（井伊）直弼を「師直」と言い換えています。これは当時の歌舞伎などと同様で、もちろん、聞く方もそのことは十分にわかった上で聞いていました。

○新版ちよぼくれ（種新史料一第四編）

萬延元年庚申三月櫻田の變に付き種々の落首歎詰等の中にあるを抄出して當時の景況一斑を知るに足るを以て其鄙野の言辭なるもしはらく之を収む其辭を捨て其意を知るの便に供す

はいく、嘗さん聞てもくんやれ、わつちも此度井伊事聞えよ、櫻田御門の、その又手前の場所ほこへら、松平吉元正衣御門右のまんなので、四十七人三十九かけてすぐ立ちたる十七人が、當時の出の師直様を、ちよぼくれとちよん切死、咄を聞ぬへ、年は安政七つの中、時は三月止巳先節切よ、諸國大名登城の折よ胸に相圖の拍子木折て、松の蔭下の遺恨ぢやなひか、師直おそしと、手くすね引て、まつとも

「新版ちよぼくれ」
（小川五郎収集史料 213）

写真は「臨野堂草稿」（「臨野堂」は小川五郎の雅号）の罫紙に書かれたもので、冒頭にとりあげた「新版ちよぼくれぶし」のほか、「時事を評する長歌」、文久2年（1862）頃に大流行した「新聞（しんもん）チヨボクレ」等を納めてあります。

当館には、そのほか「菟山漫録」3（毛利家文庫 29 風説 52）に3種のちよぼくれが残されています。

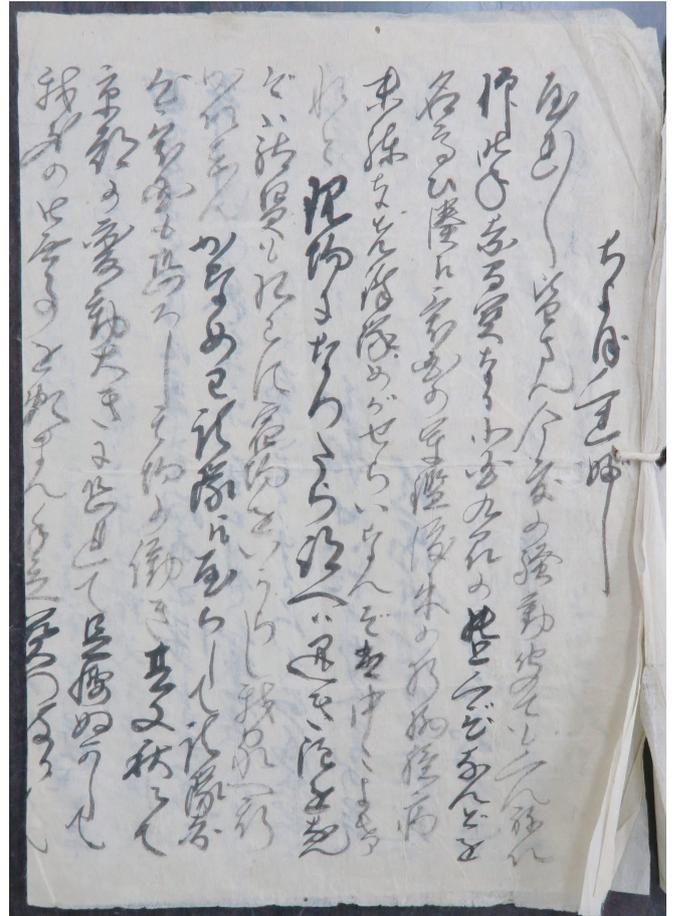
【大田絵堂戦のちよぼくれぶし】

ちよぼくれは大坂や江戸だけでなく、地方においても、そこで起きた事件を題材に作られ、歌われ（語られ）ました。まさに今日でいうニュースの一形態といえるでしょう。当館の塩田家文書・佐川家文書（大島町）にのこる、「大田・絵堂の戦い」を題材にしたちよぼくれを紹介します。

大田・絵堂の戦いは元治2年（1865）正月、美祢市美東町の大田・絵堂を主戦地として、萩藩政府の正規軍である先鋒隊（撰鋒隊）と、高杉晋作・伊藤博文・山県有朋ら諸隊との間で戦われた内戦です。1月6日の夜半に諸隊側の奇襲で始まった戦闘は、10日間の交戦で諸隊が勝利しました。

諸隊の勝利は藩の政治転換をもたらし、大村益次郎が登用されて軍政改革に着手、第二次幕長戦争（四境戦争）で長州側が勝利することで、時代は明治維新へと突き進むことになりました。

右の写真は萩藩士だった塩田家につたわったもので、同内容のものが佐川家文書（大島町）143にもあります。



「美祢郡大田絵堂戦ちよぼくれ節」（塩田家文書1029）
 ＊意味のとれない部分を佐川家文書（大島町）143で対校した歌詞を〔イ〕として下に示します。

ちよぼくれぶし

やれやれ皆さん今度の騒動聞いてもくんない、

抑（そもそも）昨年赤間関なる北国九州の、のどくびなんぞを〔トイ〕

名高ひ湊江異国の軍艦渡来の折柄、臆病未練な

先（撰） 鋒隊めが、せうい「攘夷イ」なんぞは中々よけれど、

現場になつたら跡へハ（トイ） 退き、注進なんぞハ（トイ） 駄賃も払わず、

宿場をいからし（いらかしイ） 我家へ斯（戻つてイ）、

〔御上の御無事を尋る有様、 聞るゝ事かへ、イ〕

かい〔肝イ〕 じんかなめわ諸隊江やらして、 諸隊〔のイ〕 赤心

異国も恐ろし〔るゝイ〕、 其場の働き、 其又秋二て〔からイ〕 京都の変動

大きに恐れて足腰ぬかして

我身の御無事を（ハイ）頼まん手立（にイ）、 関門破りて

御屋形とき除け、 上々様をハ萩江と弔ひ（伴ひイ）、

そりゃ又よけれど（そイ） 東の親父や、 尾張（州イ）の（親父イ）や、

てき（敵イ）の 先手に立たる奴原（やつらイ）を、 城下に連れ込ミ

苦しい年越気楽二やらして、 大金渡して

ヘイコリヤハイコリヤ、 へだばりまわつて、

正義（義）に（でイ） 堅メル諸隊の死をば〔諸隊ものをばイ〕 分散せいだのなんのかのとて

あけくのわ（はい）てには、 諸隊追討の立札なんぞを

諸郡へ立たる（わイ）、 まだまだよけれど、 却而（かえつて） 我身の追打となるのを、

ちつともしらずに、 のっけに一番

絵堂の夜討に、 肝を潰して大きなこんざつ（混雑）、

やれ逃げそりゃにげ、 物も大小もなにもいらぬ、

そりゃ又よけれど、 がたがたふる（振りイ） ふて、

座板の下からごそそ出るやら、 漬物桶から頭を出スやら、

手足もかなわず、 大小もる（貰） ふて、

ひゃこひゃこ（ひよこひよこイ） 逃行き、 夫もこ（懲） りずに、 又々合戦

十二（と引イ） 器械（大砲カ）も残らず取られて、 黒米くる（食） ふて

目計（ほか） りぎよる（きらい） つき、 漸々（ようよう） 又して（今でイ） ハ

合点がいったか、 人を刺（頼んイ） で降参なんぞと聞ゆる事かへ

〔まだまだイ〕 云ふ事（幾つもイ） あれども、 こんなにたわけハ

相手にならない、 ヘイサアホイヘイサアホイ